

季節を詠む、
時流を詠む

四季の歌

美野里短歌クラブ

年を経て家は静かに思い出に耽りて安らぐ居場所となりゆく
できるなら杖をつかずに歩こうと表に出たがまた戻りたり
夏去りて雨降る毎に雑草は芽を出し野菜を越えて伸びおり
霜降りてゆずの実黄色鮮やかに白菜漬けに添えて楽しむ
ウイルスの感染怖し外出を控えて今日も日向ぼこする

小川短歌会

真向ひの木々を透かして出づる陽に穩し日常希いおろがむ
いと細き幹のたわみて南天の紅き垂り実が新春を祝ぐ
昨日まで満開だった皇帝ダリア今朝の寒さに枯れてしまえり
電話より伝わる喃語の息づかい傍に聞くごと耳あたたかし

玉里短歌会

正月花の松と千両 蠟梅は庭に蕾を膨らませいる
人入らぬ林の奥のカラスウリ赤々と冬の西日が照らす
コロナ禍の幸先詣で朝日射す大宮神社の石段のぼる
長き睫もつ牛たちの涙目はコロナウイルスに病む世を映す
今年こそ家族等しく幸あれと氏神様にぬかずき祈る

寄稿

演歌節たづさり人の胸の内夢と努力が華と開き居り
僅かなる初栗売れた茶封筒懐かしきかな給料日を
見廻りで松の根近く福寿草



みづうみ俳句会

コルセット夜寒身に沁む八十路かな
感染の数字踊りて山眠る
大寒の空を貫く飛行雲
すこやかな孫の成長福は内
今年又姿見せ来る庭のガマ

みのり俳句会

魚跳ねて池の満月こわしけり
下校児も元気に歩む冬日和
柚子落とす母の御年九十六
会釈されマスクの人の分からず
白菜のみずみずしさを買いにけり

檸檬の会

三ヶ日の少年ボール蹴り続け
日向路拾い歩きの風寒し
夫の酌冷めたおでんの竹輪食む
花散りて皇帝ダリア掃かれゆく
車窓より筑波嶺拝み初出勤

くるみ俳句会

受け付けに鏡餅ある診療所
小寒の空深々と晴れにけり
初夢の余韻に浸る寝床かな
羽子板の突くをためらふ華麗な絵
古希といふ節目の年の初日浴ぶ

玉里俳句会

「神磯」の波濤いつきに筆始
コロナ禍や手渡し出来ぬお年玉
賀詞交歓テレビ電話の新時代
初鴉一声鳴くや急降下
初筑波紫紺きりりと威儀正す

小美玉川柳会

カーテンが揺れて境界見え隠れ
茨城はビリで通せば面白い
道しるべ澄んだ空気の方を指す
辛いなあ自粛で私治安維持
お年玉口座を聞いてネットから

岩崎 健次郎
奥村 とき
宇都宮 和子
碓谷 きえ
白根沢 清香
中根 良子
石田 はる江
根本 智恵子
幡谷 啓子
高田 久子
正木 敦子
鶴町 文男
齋藤 かつみ
石橋 吉生
平澤 ヒロ江
藤田 久子
深作 茂登子

長島 久美子
長島 美奈子
長島 昭
三村 久子
茅場 久子
井坂 あさ子
坂藤 光子
佐藤 清子
島田 草子
白根沢 清香
井坂 あさ子
岡島 久進
矢口 富久
塚田 忠男
村田 妙子
安川 昭山
荒川 粟山
小原 エミ
大曾根 菊女
信田 宣
松田 通喜
斉藤 富子
矢口 友子
菅谷 さい子
野口 初江
原島 富貴子
岡川 白史
枝川 悟史
流川 史
裕川 史